

巻頭言

論文掲載は執筆者と査読者の共同作業である

査読とは、研究者が執筆して学術誌に投稿した論文が掲載される前に行われる、研究者仲間や同分野の専門家による評価や検証のことである。すなわち、論文執筆者にとっては、自らの論文が学術誌に掲載されるために、突破しなければならない最大の関門である。査読者からは、時として大幅な修正を求められたり不採択になることもあるが、多くの場合は概ね公平な立場からコメントが寄せられる。論文執筆者は感情的にならず、平身低頭、懇切丁寧かつ論理的に返事を書き、論文を修正し、査読者を納得させなければならない。その地道な作業が論文掲載への扉を開くことになる。そして多くの場合、査読者のコメントは、今後の研究を進めていく上での貴重なアドバイスとなる。

一方、査読者に選ばれることは名誉なことであるが、その任務を全うするのは大変なことである。査読者は決められた期日までに論文を読み、学問的価値（新規性、信頼性）と適格性（論理性、完成度）の点から、論文の内容を客観的に評価しなければならない。査読は論文掲載の可否だけでなく、投稿された学術誌への掲載にふさわしいレベルにまで論文の質を高めるための前向きなプロセスである。査読によって掲載する論文の質を高めることは、その学術誌の学問的な評価を高めることにもつながる。そういう意味で、論文の掲載は執筆者と査読者の共同作業であり、査読者も大きな責任を負うことを忘れてはならない。

筆者が初めて海外の学術誌に投稿した頃は、UPSで論文を送り、忘れた頃に難解かつ判読不能な査読者のコメントが戻ってくるというあり様で、手間と時間とお金がかかっていた。それだけに、返事が戻ってきたときの喜び、いや落胆は大きかった。今では、多くの学術誌がonlineで投稿できるようになり、査読の結果も2～4週間以内にe-mailで戻ってくるようになった。その分、コメントの有難みや論文掲載の喜びが薄れたような気もする。

筆者は、現在いくつかの学術誌の査読委員を担当している身にあつて、常に査読の締め切りに追われる日々を送っている。論文執筆者と査読者の苦悩はいずれも十分実感しているつもりである。さらに縁あつて、今年度より看護学ジャーナルの編集委員長を務めさせていただいている。几帳面な論文執筆者と協力的かつ建設的な査読者のおかげで、編集者としての苦悩は味わうことなく第11巻の発刊に至った。冊子が若干薄いことは気になるが、いずれも完成度の高い論文が掲載されている。論文執筆者と査読者に深謝するとともに、ご一読いただいた皆様方の、今後の臨床および研究の一助になれば幸いである。

2014年3月

広島国際大学看護学部 学部長
看護学部学術誌 編集委員長 島谷 智彦